

# 悠久の京を訪ねて Part III Vol.8



京は古より人々が集い、その気候・風土の中、人々の生活が営まれてきました。  
 京都府内の遺跡で多数発掘された出土品により、縄文・弥生時代までさかのぼり、当時の様子を知ることができます。  
 私たちが住んでいる地域にはどのような歴史があったのか、出土した資料を基に過去の文化やその発祥の歴史を訪ねましょう。

## 塩づくりの風景 — 海に面した生活 —

浦入遺跡



### ■塩づくりの風景

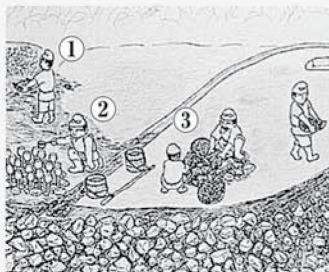


空からみた浦入遺跡

塩は必需品として縄文時代より海水を用いて作られています。

舞鶴市に所在する浦入遺跡は、舞鶴湾に開いた小さな入り江(浦入湾)の海浜部にあります(写真)。発掘調査によって、奈良・平安時代の大規模な製塩遺跡(塩づくりのあと)がみつかりました。

古代では、丹後地域から若狭湾沿岸において土器を使用した塩づくりのあと(土器製塩の遺跡)が数多くみられます。この地域の塩づくりは、まず海藻などに海水を何回もかけて濃い海水を作り①、この海水を土器(製塩土器)に入れて煮詰めて塩の結晶をつくります②。これを取り出して再度加熱することで、食用の塩ができます③。浦入遺跡では②の工程で使用された



塩づくりのイメージ(提供:舞鶴市教育委員会)

製塩土器が多数出土しました。奈良時代には0.5ℓほど入る平底の土器(1)を使っていましたが、平安時代になると0.07ℓほどしか入らない非常に薄い小さなコップ形土器(2)にかわります。細長い棒状の支脚(3)にこの製塩土器を載せて立てて据え置き、加熱しました。

### ■塩づくりの体制

奈良時代には、平城宮出土木簡により若狭国から税として塩が納められていることが知られていました。浦入遺跡の塩も、生産規模の大きさから税として国に納められたものと考えられます。また、この遺跡からは、平安時代の「笠百私印」と刻印された支脚(4)が出土しています。

これは「笠<sup>かさ</sup>という氏族の百□という人物の私印」と解釈でき、笠氏がこの地の塩生産に深く関わりをもっていたことが窺えます。



入遺跡から出土した製塩土器(1,3:「浦入遺跡群発掘調査報告書」(京都府埋蔵文化財調査研究センター)、2,4:「浦入遺跡発掘調査報告書」(舞鶴市教育委員会)より加筆転載)